



〒651-0073 神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1

Phone:078-262-0901

<http://www.artm.pref.hyogo.jp>

学芸員の視点 ————— ②③

東山嘉事とタム・タム芸術団体 —— 服部 正

特別寄稿 ————— ④⑤

世界帝国のオマージューハブスブルク家の

芸術コレクション —— 山之内克子

ショート・エッセイ ————— ⑥

すべての人が楽しめる展示を目指して —— 飯尾由貴子

トピックス ————— ⑦

美術館でブラジル!

館外での所蔵品の活躍

美術館の周縁 ————— ⑧

古楽器製作家・平山照秋氏の

アトリエを訪ねて —— 岡本弘毅

ARTRAMBLE

田村は1929(昭和4)年から30年以上にわたって、神戸

を拠点に活動しました。それもあって、同じ年生まれで神戸

を代表する洋画家、小磯良平としばしば比較されることもあります。実際田村と小磯は親密に交流を持ち、互いに敬意を表しています。しかし田村の画風は、小磯の堅牢なデッサンに基づくアカデミックな写実主義とは対照的に、油絵の具の特性を活かした鮮やかな色彩と、フォーヴィズムやキュビズムなどを自由に駆使したモチーフの表現など、より現代的な側面が強く表れていて、それは第3回二紀展に出品されたこの作品にも見て取れます。

(相良周作／当館学芸員)

黒い扇子を持ってソファーに腰掛ける裸婦が描かれています。きわめて素早い筆づかいによって、裸婦の肉づけが的確に表現されています。背景の白の色調と黒い扇子の対比が効果的であり、その扇子から裸婦の顔半分が透けて見えるといった演出や、裸婦の頭部と脚部を画面から断ち切って斜めに配置した大胆で卓抜な構図ともあいまって、非常に魅力的な裸婦像となっています。

1903(明治36)年大阪に生まれた田村は、最初東京の太平洋画会研究所で、その後関西に戻り小出橋重のもとで洋画を学び、1924(大正13)年の信濃橋洋画研究所の開所と同時に入所します。1926(大正15)年二科展に初入選、1931(昭和6)年には六甲洋画研究所を開設し指導に当たります。また戦後1947(昭和22)年には、全国的な美術団体である二紀会の創立に加わりました。

田村孝之介(1903~1986)

黒い扇子

1949年

90.9×72.7cm

油彩・布

平成19年度伊藤文化財団寄贈

東山嘉事とタム・タム芸術集団

服部 正

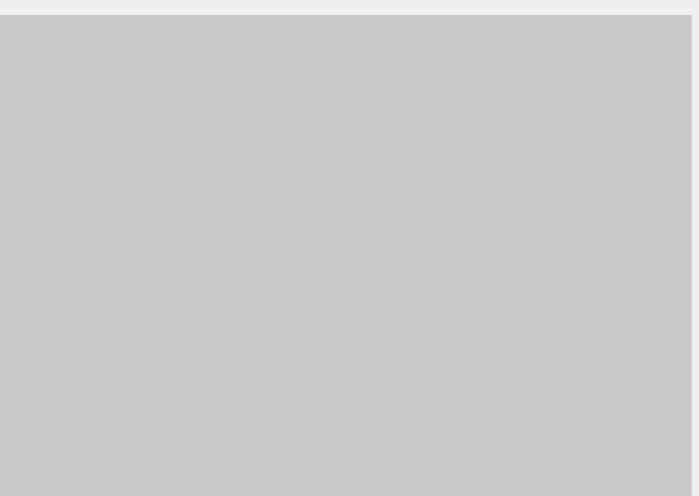
東山嘉事は猥雑な芸術家である。彼の生前の仕事ぶりを振り返ると、「猥雑な」というのは最大限の賛辞ではないかと思うが、もし兵庫県文化賞を受賞した芸術家に対して礼を失しているというならば、多彩な活動を展開した芸術家と言い換えてもよいだろう。当館では、東山嘉事の三回忌に合わせて、彼の画業を検証する展覧会を開催した。常設展示室の一隅を用いたさやかな企画展ではあるが、公立美術館が開催する初めての回顧展である。ここでは、今回の「東山嘉事展」(2008年11月22日～2009年3月15日)を通じて見えてきた東山嘉事の作品の特徴について考えてみたい。

今回の展覧会を通してまず気付くのは、東山嘉事が作品の材料として用いた素材の多様さである。油彩画に始まり、ペンによる素描、陶芸、石彫、木彫、鉄の立体、プラスチックや石膏や紙のオブジェ、廃材を寄せ集めたジャンクアート、さらにはステージ上でのパフォーマンスまで、ありとあらゆる技法で作品を制作していることが分かる。それらは、時に下品で時に高潔であり、時に美しく時に醜い。そして、ある時は明朗である時も悲痛だ。この捉えどころのなさ、良い意味での節操のなさこそが

東山嘉事の魅力ではあるのだが、その奥に通底するものを見据えたいという思いがある。展示室で雑多な作品を眺めているうちに湧き起つてくる。

東山嘉事は、1934(昭和9)年に大阪市で生まれた。父は市内で工務店を営んでいたという。終戦間近の1944(昭和19)年、10歳の時に家族とともに三田市藍本(当時の有馬郡藍村)へ疎開し、そこで中学校を卒業する。記録に残る最初の展覧会歴は、1955(昭和30)年の「第6回西宮市展」での教育委員会賞1席受賞であり、翌年には三田市公民館で個展を開催して27点の作品を展示している。つまり、20歳の頃に洋画家を目指して活動を始めたということになる。その後、「西宮市展」、「関西行動展」などで順調に入選を重ね、1956(昭和31)年には大阪市浪速区へ転居、翌年には市内の白鳳画廊で個展を行うなど、画家を目指す若者が歩む道のりを、彼もまた順調に進んでいたように思われる。

1960(昭和35)年、そんな東山に転機が訪れた。彼は2年前からディスプレイ・デザイナーとして株式会社日新に勤務していたが、この年に同社の東京支店に転勤となり、小金井市に転居することになったのである。東京時代の東山は、油彩画の



1 東山嘉事『洗濯』1961年 『TAM-TAM』第13号掲載「ホモ・サビエンス」より



2 会場風景 (『曼陀羅を喰う』1994-99年頃 など)

学芸員の視点

のが北田との最初の出会いだったという。そして、1961(昭和36)年7月に発行された『TAM-TAM』第13号において、東山は「東山カジ」の名前で表紙のデザインを担当するとともに、巻頭の第4ページから4ページにわたって1コマ漫画「ホモ・サビエンス」(図1)を発表する。これが『TAM-TAM』誌への東山のデビューとなった。

このグループの実質上の主宰者であった北田は、洗練されたシンプルな線描によってエロティックでグロテスクなテーマを描いたこの漫画連作を高く評価していたようである。そして、この北田の期待に応えるように、東山はそれ以後の『総合芸術』において一貫して表紙のデザインを担当し、それと同時に誌面で漫画を発表したり、挿絵を提供し続けることになる。タム・タム芸術集団の活動は、東山が東京を離れる頃にはほぼ終息に向かっていた。つまり、東山がこのグループに関わったのは約5年間であり、彼の画業全体を考えれば決して長いとはいえない期間だった。しかしそれは、東山嘉事の作風に決定的な影響を与えたものだったと思われる。

タム・タム芸術集団の信条は、「現代芸術が日々大衆と乖離していく状況にたいし、現代芸術は絶対的に大衆と遊離しては存在しない」という認識から、大衆のなまなましい生活的社会的次元と密着し、芸術表層上の主題を、現代大衆が興味をいだく生活感覚におき、一方、作家の内的な深層主題は、冷厳な現実把握のクリティシズムと思想性でもって創造活動を支える」(『TAM-TAM』第12号、1960年)というものであった。つまり、作品の主題としては社会への批判精神や深い思想性を保つつも、外的な様式としては難解な表現に向かうことなく、「現代大衆が興味をいだく」ものでなければならないというのである。それは、専門領域化し理知的傾向を強める同時代の美術への批判でもあり、高度経済成長の名のもとで加速的に進められた資本主義文明化社会への批判でもあった。

このような信条の洗礼を受けた東山嘉事は、抽象絵画の制作から離れて、官能的でグロテスクなマンガによって「現代大衆が興味をいだく」表現を目指したのである。そして、その官能性や怪奇性は、1990年代の中頃以降に盛んに制作されたフム・フム族の絵画やオブジェ(図2)にも引き継がれている。東山嘉事は、社会に対する旺盛な批判精神をもちながらも、決して高尚で難解な芸術に向かわず、常に周囲の人を楽しませることを忘れない芸術家だった。この独特の毒とユーモアを培ったのは、20代後半から30代の前半にかけて関わったタム・タム芸術集団での活動だったのでないだろうか。展覧会の維多な作品群は、そのような人間・東山嘉事の姿勢を中心に据えたとき、統一感をもって浮かび上がってくるよう思う。様々な素材で作られた「猥雑な」作品を貴いているのは、批判精神と現代大衆への接近という東山嘉事の生涯を通じての信念なのである。

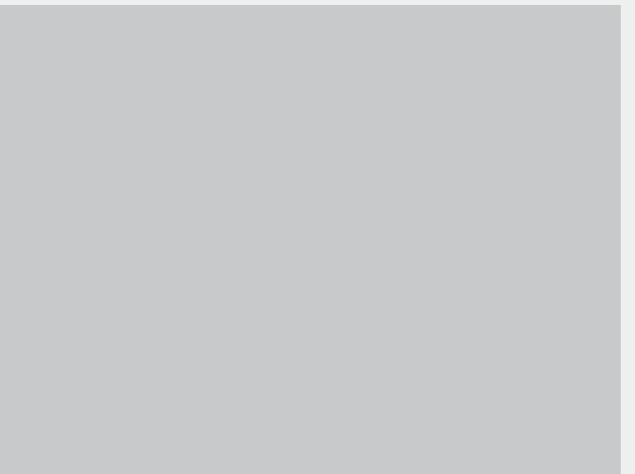
(はつとり・ただし／当館学芸員)



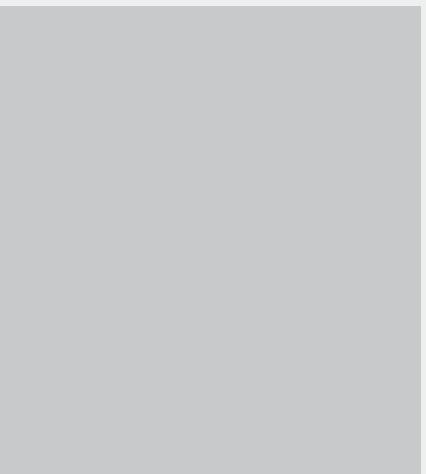
会場風景

世界帝国のオマージュ— ハプスブルク家の芸術コレクション

山之内 克子



ダーフィット・テニールス
『ブリュッセルのレオポルト・ヴィルヘルム大公コレクション』
1651年頃 ウィーン美術史美術館



フランチェスコ・ソリメーナ
『カール6世とアルターン伯爵』 1728年
ウィーン美術史美術館

人は、なぜモノを集めるのか。稀観書からティベアまで、古今のさまざまな蒐集行為を論じたアメリカの精神分析学者、ワーナー・ミュンスター・バーガーによれば、コレクションとは、内容のいかんにかかわらず、蒐集家の意識のなかで、「自分は何者なのか」という問いかけに答える確かな自己イメージを形成し、さらにこれを自他に向けて確認するための、かけがえのない心理的機能を果たしているのだという。稀少な天産物、武器、楽器、古文書、絵画、彫刻など、あらゆる分野を網羅する文化財を数世紀にわたって蒐集し続けたハプスブルク家のコレクションもまた、その文脈の外にあるものではない。『静物画の秘密展』においてもっとも輝かしい片鱗を垣間みせた膨大なコレクションは、かつてスペイン、イタリアからチェコ、ハンガリー、ボーランドにおよび巨大な版図を一手に収めた皇帝たちによる、世界支配者としての自意識を鮮やかに象徴しているのだ。

はるか10世紀に起源をもつハプスブルク家が所有した金銀財宝は、もともと、同家の財産のうちの単なる動産部分として認識してきた。これらは宝物庫に厳重に保管され、また、ときには換金され、贈与されることもあったという。この「家宝」に対して独自の社会文化的意義が与えられるようになったのは、15世紀末、皇帝マクシミリアン1世の治世(1493-1519のことである。政略結婚を領土拡大のためのもつとも有効な手段とみなし、「幸いなるオーストリアよ、汝、結婚せよ」の語を家訓として残したマクシミリアンは、自身もブルゴーニュ公国(の女子相続人マリー、さらにその後にはミラノ公女ビアンカ・マリア・スフォルツァを娶り、これによってネーデルラントや北イタリアへと勢力を伸ばした。

だが、皇帝の「有利な結婚」がもたらしたもののは、新たな領土と財産だけではなかった。二人の妃を通じて、ハプスブルク家は、イタリア、フランス、オランダに花開いたルネサンス文化との邂逅を体験する。とりわけ、知と学問への飽くなき探求を志向した人文主義の理想とともに、学芸保護および、芸術作品や書物の蒐集そのものを美德とみる考え方方が、オーストリアにもしだいに定着していった。皇帝マクシミリアンがアルブレヒト・デューラーのパトロンとなったのは、支配者の単なる気紛れなどではなかったのだ。手厚い芸術庇護と同時に、代々にわたって集められた美術品や財宝類もまた、学芸に通じた君主の高い徳性を顯示するという、新たな役割を負うことになった。

とりわけ、時代とともに漸増する蒐集品の内容的な多様性のなかに、人びとはやがて、世界と宇宙の象徴としての意味を読み取ろうとした。珍奇な鉱物・動植物の標本から、匠の技を結集した工芸品、絵画作品にいたるまで、現世に存在しうるすべての「興味深く、感嘆に値する品々」を統轄することで、皇家のコレクションは、人為と自然を結びつけながら、万有を顕す一種の小宇宙を形づくるべきものとなつた。

森羅万象の緻密な再現を意図したこれらの蒐集行為は、まさしく、当時、中央ヨーロッパ全域に領土を拡張しつつあったハプスブルク帝国の、「世界支配者」としての自意識に支えられていたにほかならない。たとえば、16世紀、財宝を収める「宝物庫」が「芸術収集室」に改称され、さらに新宮殿へと移設されたことは、君主たちのコレクションに対する心的態度の劇的な変化を明らかに標しつけている。蒐集物はもはや、単に貴重品として保管されるだけでは充分ではなかった。それらは当時の「普遍的な知の理想」にしたがって区分され、展示され、折にふれて公開されることで、世界を治める君主の威光を人びとに強く印象づけることになったのだった。熱狂的な蒐集家として名高い皇帝ルドルフ2世をはじめ、この時代のハプスブルク家一族はみな、明らかにこうした普遍性と世界支配の理想を抱きつつ、その夥しいコレクションをさらに増大させていったのである。

一方、17世紀になると、近代的学問の萌芽と知識の専門分化にともなって、コレクションの普遍的性格もしだいに失われていく。皇家の膨大な蒐集品は、図書、古銭、鉱物標本などに細かく分類され、それぞれの専門家による管理のもと、専用の収集室に分かれられて収蔵されるようになった。こうした趨勢のなかで、ハプスブルク家のコレクターのあいだに、もっぱら絵画作品だけを蒐集するスタイルがひとつの伝統として根づきはじめる。

なかでも、並外れた審美眼をもつ絵画蒐集家として、現ウィーン美術史美術館のコレクションに礎を築くことになったのが、皇帝フェルディナント2世の末子、レオポルト・ヴィルヘルム大公(1614-1662)である。幼少時より聖職者としての道を定められながら、三十年戦争で輝かしい軍事的キャリアを積んだ大公は、1646年、従兄弟で義兄のスペイン王、フェリペ4世によってスペイン領ネーデルラント総督に任命された。ちょうどこの時期、長期にわたる悲惨な宗教戦争に終止符を打ったウェストファリア条約(1648年)に前後して、宗派対立の渦巻くオランダ、フランドルに訪れた束の間の平和が、芸術愛好家の大公に本格的な美術品蒐集のための理想的な環境を提供することになる。ネーデルラント入りしてまもなく、レオポルト・ヴィルヘルムは、ブリュッセルやアントウェルペンで活躍する画家の工房にみずから足繁く通い、フランドル絵画の最新傑作を、しばしば画架に掛けた状態のまま買いつけてといる。また、イギリスにおけるピューリタン革命勃発から約10年を経た当時、処刑の憂き目をみた国王チャールズ1世のほか、凋落した名門貴族による第一級の美術コレクションが相次いで競売に付されたことも、彼の蒐集活動にとってまたとない好機となった。特に、大公がほぼ完全な形で買収したハミルトン公爵の絵画ギャラリーは、イタリア・ルネサンスの名品を数多く、ハプスブルク家にもたらすことになった。

三十年戦争で散逸した父祖ルドルフ2世のコレクションを買い戻すなど、その熱

心な蒐集活動のかたわら、大公は、宮廷画家として召致したダーフィット・テニールスに命じて、作品の体系的な分類・整理にも着手する。テニールスが約十年をかけて完成させた『絵画の劇場』は、244点のイタリア絵画を銅版画を通じて再現することで、ハプスブルク家の絵画コレクションにとって最初の本格的図録となったのである。さらに、同じ画家が残した数点の「画廊画」は、至宝ともいるべき大公の絵画収集室の、比類なき豪奢をいまに伝えている。コレクターの姿形とともに蒐集品の全貌を俯瞰して描く「画廊画」とは、17世紀、富裕層のあいだに美術品蒐集の習慣が普及したネーデルラントで爆発的な流行をみたひとつのジャンルである。しかし、テニールスが単に既存の形式に倣ったに過ぎないにせよ、画家による案内を受けながら画面の左中央に立つレオポルト・ヴィルヘルムの威儀に満ちたポーズが、古今のあらゆる傑作を手中に収め、芸術の世界に君臨する「支配者」としての自意識の表徴であることに変わりはないだろう。『絵画の劇場』とともに、これらの「画廊画」は、今日、美術史美術館が所蔵する作品の来歴を知るために、貴重なドキュメントとしても広く知られている。

数百点におよんだレオポルト・ヴィルヘルムの蒐集品は、彼がネーデルラント総督を辞すと、ただちに一点も残すことなく陸路ウィーンへと運ばれ、その死後は、甥に当たる皇帝レオポルト1世によって相続されて、皇家のコレクションを格段に充実させることになった。やがて18世紀に入り、ハプスブルク帝国の領土拡大政策がそのターゲットをイタリアやネーデルラントから中・東欧へとシフトさせたのちも、これらの作品がなお、皇帝たちにとって「世界支配」の理想を視覚化するシンボルとして機能し続けたことは、1728年にカール6世が描かせた一枚の肖像画が明証するところである。帝室絵画ギャラリーの改裝・再編成を記念して制作されたこの絵のなかで、恭しく跪いて収蔵品目録を差し出す財務大臣アルターン伯爵を前に、先祖伝來の甲冑に身を包み、ハプスブルク家の宗主を表す金羊毛勲章を着けて佇んだカールの姿は、まさしく現世の英雄、世界唯一の為政者としての図像にはかならない。画面左手で聖ローマ帝国の帝冠を捧げ持つ精靈は、ハプスブルク皇帝の権力が神によって授けられたものであることを、見る者の心に改めて強く意識させたことだろう。

このように、代々、巨大帝国を統べてきた皇帝たちの「自己意識と理想の表出」としての性格を強く保ちながら、一方で、ハプスブルク家の芸術コレクションは古い時代から広く一般に公開されてもいたのである。19世紀末に今日の美術館が落成をみる以前は、首都の南高台に立つベルヴェデーレ宮殿の2、3階部分(現オーストリア絵画館)が帝室絵画ギャラリーの展示スペースに充てられ、週のうち3日が無料公開日として定められていた。18世紀のウィーンを描いた多くの旅行記は、ラファエ

ロからレンブラントまで、巨匠たちの傑作を所狭しと掲げたその壯観なさまを詳細に伝えている。ここに描かれた、市民も旅行者も互いに混和して、老若男女がひとしく芸術品に親しむ光景は、現在の美術史美術館の日常とほとんど変わることろがない。ただ、ドイツの旅行作家、カスパー・リースベックによれば、女帝マリア・テレジア時代には、「あまりにも刺激的な題材の作品は、緑色のタフタ製の覆いが掛けられていた」のだという。絵を観たい者は誰でも、みずから覆い布をめくり上げることを許されていだが、好奇心に満ちた紳士がタフタを上げるたび、その背後に控えた婦人たちは軽いよめきを上げ、羞恥のあまりみな一様に扇で顔を隠すのだった。緑の布で覆われた作品とは、おそらくは官能的な裸婦像だったのだろう。ルーベンスの《エフィジェニア》像も、ヤンセンスによる《ヴィーナスとアドニス》も、タフタの下に隠されていたのだろうか。当時のあまりにもナイーヴな道徳観を偲ばせるこのエピソードは、今日、同じコレクションを訪れるわれわれの想像力を刺激してやまないのである。

(やまと・うち・よしこ／神戸市外国语大学教授)

早稲田大学大学院文学研究科西洋史学専修博士課程を単位取得退学後、ウィーン大学精神科学部経済社会史学科にてPh.D.を取得。ウィーンを中心とするドイツ語圏および旧ハプスブルク帝国領の諸都市に関して、社会文化史的な見地から研究を行っている。



ペーテル・パウル・ルーベンス《チモーネとエフィジェニア》
1617年頃 ウィーン美術史美術館

すべての人が楽しめる 展示を目指して 飯尾 由貴子

ショート・エッセイ

2008年度のコレクション展が「子ども」の鑑賞に力点をおいて構成されていることは本誌21号、19号でもご紹介したとおりである。今年度最後のコレクション展Ⅲでも、その方針を継承し、「親子で楽しむアート 現代美術の世界へようこそ!」と銘打って当館の収蔵品を展示了。

子どもが楽しく作品を見るためにはどのような工夫が必要なのか、本誌19号で避免学芸員が書いているように、いろいろなやり方が考えられるだろう。色や形が楽しい作品やストーリー性のある作品を選ぶ、キャプションの文字を大きくしたり、位置を低くしたりする、子どもが動きやすいシンプルな会場構成にする、作品に関連するワークシートやパズルなどの鑑賞ツールを導入する…などである。これらの工夫によって今年度のコレクション展では、普段見慣れた展示室の光景ががらっと変わり、私自身新しい展示の可能性や作品の別の魅力を見いだせたように思う。

さて今年度最後のコレクション展では、子どもに楽しんでもらうために「対話」という方法に着目した。学校団体の鑑賞を除けば、子どもが美術館を訪れるのは大人と一緒にいるから、大人(親)とあれこれ会話しながら作品を味わってもらうような展示を考えてみた。では作品をめぐる会話をどのように引き出せばよいのかーこれについてはかなり頭を悩ませたが、最終的に「Q&A方式」を探ることとした。すなわち子どもからの(への)問い合わせに対して大人が答える、というやり方である。いくつかの作品の横に子どもが発しそうな疑問、または(かなり誘導ともどれるのだが)問い合わせを書いたキャプションを付け、それに対する答え(正解という意味ではない)を、入場者全員に配布する作品解説リーフレットと展示室配置の解説シートに記すという単純なものである。作品を見ての感想は人それぞれであり、どういう見方、感じ方をせよ、という狙いではもちろんないのだが、作品を見るひとつのきっかけとしてこのような問い合わせの言葉を導入したのである。

子ども向けの本や解説書には必ず魅力的なイラストや絵が添えられている。漫



展示室に配置したQ&Aシート



展示風景

画で書かれた歴史や伝記も子ども向けの教育書として人気を誇っている。言葉だけではわかりにくい事柄をイメージが手助けするのである。それでは美術鑑賞についてはどうか。美術というイメージの世界を鑑賞へと導くものは、きっかけとなる言葉、ちょっとした問いかけであると思う。ぼんやりとした思いが言葉となってはじめて、目の前の作品を能動的に「見た」ことになるのではないだろうか。

今年度のコレクション展ではある意味美術鑑賞者の「年齢制限」を設けた形となった。子どもの鑑賞に重点を置いたらといつてももちろん大人が排除されたわけではない。しかし、子どもを鑑賞の主体として想定したことにより、展示の方法がかなり変化したことは事実である。子どもは何に興味を持つのか、何を面白がるのか、逆に子どもが興味をもたないものは何なのか、どういうものがわかりやすく、どういうものがわかりにくいのか。今回についてもこのようなことを反芻して展示を考えた。私が担当した展覧会の中で最も鑑賞者の目を意識した展示となつたといえるかもしれない。そしてそのことは逆に今まで展覧会の内容にばかり気を取られ、鑑賞者を迎えるための展示上の配慮がもうひとつ足りなかったのではないか、という反省に至らしめることになった。

子どもの目を意識することは大人の目を意識することに繋がる。子ども向けのガイドが大人にとってもわかりやすい手引きとなるのは、子ども向けのものには言葉の選び方や使い方、内容の吟味と構成、デザイン、装丁に至るまで徹底した工夫がこらされているからである。このような配慮がひいては大人をも惹きつける結果になるのであろう。美術館での展示もこれと同様のことが言えるのではないか。子どもがどう見るかを常に考慮する必要があるということだ。無論展覧会の内容によっては難しい場合もある。だが一度でも子どもの目を意識するといつては鑑賞者に与える印象は全く違ってくるであろう。自分の展示を見る者の立場でシビアに眺める想像力ーこれが学芸員の「展示力」を高めていくために不可欠な要素ではなかろうかー子どもという鑑賞者には展示のあり方を考えるヒントが沢山隠されているのだ。

(いいお・ゆきこ／当館学芸員)



展示室の一角に設けたワークショップコーナー(アルバースさんに挑戦!)

美術館でブラジル!

「美術館でブラジル!」とは昨年の12月7日に閉幕したブラジルとの交流展「ブラジル×日本 旅が結ぶアート」のキャッチ・コピーのことで、本展の隠れた特徴である数多くの関連イベントをアピールするために考案されたものです。

講演会だけでも、出品作家によるアーティスト・トークに各界の識者によるブラジルの建築・都市計画・社会についての連続講演会、さらには身近な「ブラジル」のシンボルであるサッカーとのコラボレーションとして、ヴィッセル神戸からブラジル人選手お二人(当時)をお迎えてのトーク・ショーと、実際にバラエティに富んだものでした。人気のコンサートについては2組にご出演いただき、珍しいものではサンバとブラジルの伝統武道カボエイラのパフォーマンスがあり、さらには3本の映画・DVDの上映会も行いました。会期冒頭3日間に開催したブラジルコーヒー・フェアをあわせれば、まさに五感で味わうブラジルといった趣です。プログラムの数だけ数えてみても全15回、ミュージアム・ボランティアによる解説会など複数の日程で行われたイベントもあったため、実感としては会期中の週末は常にイベントがあるといった状況でした。

こうした関連イベントは、お客様に展覧会より親しんでいただくために行うものですが、個人的には、それまで気づかなかった身近にあるブラジルとのつながりを発見するきっかけとなりました。例えば、コンサートにご出演いただいたコンジュント・ショヴィ・シュヴァさんのグループ名の由来であるカフェが、実は大阪の靱公園園隣にある普段良く行くビルの中にあったり、美術館から歩いて10分程の所でカボエイラ教室が開催されていたりといった具合です。その他のイベントも、ご協力をいただいた地元ゆかりの企業の皆様を初め、これまでにブラジルとの交流を続けてきたたくさんの方々のご協力によって実現したものばかりです。ブラジル展の多彩なイベントは、「ご近所のブラジル」に気づかせてくれるきっかけともなったのでした。

(小林 公／当館学芸員)



2008年11月1日 ブラジルから3人の出品作家をお招きしてのアーティスト・トークの様子



2008年11月23日 ホワイエでの「これがカボエイラだ!サンバでおどろ。」の様子
出演のカボエリスト、ダンサーは神戸、大阪、京都、徳島などから駆けつけてくれました

館外での所蔵品の活躍

当館では例年20~30件程度、所蔵品の貸出を行っています。特に2009年に入ってからは、特色ある貸出が続いています。

まずこの1月から3月にかけて、兵庫県立円山川公苑美術館で開催される「描かれた風景」展に37点の油彩画を貸し出しました。円山川公苑が県北の但馬地区、コウノトリの郷として知られる豊岡に位置することから、人と自然をテーマにした事業展開の一環として企画された展覧会です。また県立美術館の所蔵品より風景画の名品を選び構成されたこの展覧会は、神戸から離れた地域の方々に向けての当館のアウトチーチ事業という側面も持っています。会期中には地域の小学校と連携して、当館のスタッフが豊岡へ赴き、子どもたちの鑑賞を支援するという活動も行いました。

4月以降は、「元永定正展」(4月11日~5月31日三重県立美術館にて)、「白髪一雄展」(4月~来年3月4会場を巡回予定)と、具体美術協会で活躍した作家たちの個展が続き、当館からも数点の代表作を出品予定です。具体的な作家による実験的、先鋭的な作品群は、

トピックス

作品保存の面から見ると脆弱で、貸出にあたっては頭を悩ませることも多いのが実情です。今回、借用依頼のあった元永定正の初期の代表作《タピエ氏》の場合、協議の結果、三重県立美術館で保存・修復を担当する田中善明課長に修復処置を施していただき、移動に耐えうる状態を確保した上で、貸し出すことになりました。処置方針を当館の田中千秋保存・修復グループリーダーと相談のうえ作業を進めるということで、公立美術館の保存・修復担当者同士が連携する貴重な機会となりました。なお、この作品については、作者自身による署名と書き込みが、後年、何者かによって塗りつぶされた状態となっていましたが、今回の修復処置の過程でこの塗りつぶしが除去されました。三重県立美術館の展覧会では、当館の所蔵品になってからはじめてオリジナルの状態で展示されることになります。

(江上ゆか／当館学芸員)



豊岡市内の小学校へ出前授業

●—編集後記

今号では、「ウィーン美術史美術館所蔵 静物画の秘密展」と「東山嘉事展」というふたつの企画展を取り上げました。かたや近世から近代にかけてヨーロッパの繁栄を伝える華麗な静物画、こなた資本主義社会の極点を経て衰退へと向かいゆく現代日本に湧き出した妖怪たち。一見対照的な雰囲気を醸し出す展覧会ですが、双方に共通するのは、出品されているモノたちがそれぞれの時代に生きる人間の姿をきわめて雄弁に描き出しているということです。ふたつの展覧会を続けてみると、まったく違う世界なのにどこかでリンクしているような気がして一興でした。

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.22

2009年3月20日発行
編集・発行:兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1
印刷:(株)サンメディア

古楽器製作家・平山照秋氏のアトリエを訪ねて

岡本 弘毅



自作のリュートを手にする平山氏

美術館の周縁

秋も深まる11月の下旬、山道を軽快に走る車のリアシートに身を沈めた私は、山の稜線を美しく彩る紅葉を窓から眺めながら、高まる期待に胸を高鳴らせていた。同乗するのは、同僚の吉田朋子学芸員と美術館友の会の大槻晃実職員である。私たちが向かう先は、兵庫県篠山市にある古楽器製作工房・平山。主に中世から19世紀にかけての古楽器全般の製作と修復を行っている職人、平山照秋氏のアトリエだ。

古楽器とは、いわゆるクラシック音楽を演奏するための楽器のうち、作曲当時のオリジナルな形態や機構を保っているもの、さらには当時の素材や製法を復元したレプリカのこと、オリジナル楽器、ピリオド楽器、オーセンティック楽器など、様々な呼び方がある。1950年代から60年代にかけて、レオンハルト、アーノンクール、ブリュッヘンらが先鞭をつけた古楽演奏の波は、70～80年代にクイケン兄弟、ホグウッド、ビノック、コーブマンらの活躍で広く一般に定着するに至った。

日本でも、70年代に小林道夫、岡本一郎といった古楽器奏者が先駆的な活動をはじめ、80年代以降は鈴木雅明、寺神戸亮らが国際的に高い評価を得るなど、古楽演奏の流れは今や完全な市民権を得た。それと並行して古楽器の製作や修復をおこなう職人も増加の一途をたどり、中には本場西洋のものにも負けない高品位な楽器を作る作家も登場している。今回お邪魔することになった平山照秋氏もまた、そうした製作者のひとりである。平山氏が凄いのは、扱う楽器の種類が非常に多岐に渡っていること。ギターやリュートといった撥弦楽器から、ヴァイオリン属やヴィオール属の擦弦楽器、チェンバロやヴァージナル、フルテピアノなどの鍵盤楽器まで、その手が生み出した楽器は多彩を極める。

私たち美術館で働く者がこのような古楽器工房をなぜ訪れたかというと、現在開催中の特別展「ウィーン美術史美術館所蔵静物画の秘密展」の準備のためである。展覧会には、リュートやヴィオラ・ダ・ガンバなど楽器を描いた絵がいくつか出品されている。会場の一角にこれらの楽器の音をヘッドホンで聴けるコーナーを設ければ、鑑賞者の皆さんとの理解はより深いものとなるにちがいない。展覧会を担当する吉田学芸員はそう考えた。そこで白羽の矢を立てたのが、以前友の会の行事でお世話になったという平山氏である。製作だけでなく演奏もひととおりこなされる氏に自作の楽器を弾いていただき、その音をMDに収録させてもらうというのが私たちの目論見であった。さらに今回の展覧会では、会期中の関連行事として、古楽器のコンサートを友の会との共催で計画している。平山氏に様々な古楽器を美術館に運び込んでいただき、解説つきの演奏会をお願いしようというのが最大の目的であった。

約2時間の山越えドライブの後、長閑な田園地帯に建つ平山邸によくやく到着し、ベルを鳴らす。名工との対面に否応なく緊張感が高まる。だが私たちを出迎えてくれた平山氏は、予想していた偏屈な親父（失礼！）とは違って人懐こい微笑を頬に

絶やさない優しげな人であり、瞳の輝きは少年のそれであった。玄関に足を踏み入れると、可憐な装飾が施されたチェンバロがまず眼に飛び込む。仕上げの美しさは音色の美しさを予想させるに十分であった。改めて来意を告げた私たちは、奥の工房へと案内された。早速コンサートへの出演を依頼したところ無事ご快諾いただき、日取りは展覧会後半の日曜日、3月8日に決まった。

次はいよいよ録音である。数ある楽器の中からリュートを手に取った平山氏がおもむろに弾き始めたのは、シチリアーナ。レスピーギのオーケストラ曲「リュートのための古風な舞曲とアリア」第三組曲で知られる作曲者不詳の名旋律であるが、間近で聴くリュートの響きのなんと美しかったことか！ 優しく爪弾いているにもかかわらず、くっきりとした輪郭を持つ音の粒子が田舎の澄み切った空気を震わせながら耳の中に飛び込んでくる。後でそのリュートを持たせもらったのだが、極限まで薄く削られた木を羊皮紙で張り合わせてつくられた楽器は羽毛のように軽かった。

続いて演奏していただいたのは、トレブル・ガンバ（高音用の小型ヴィオラ・ダ・ガンバ）による「皇帝の歌」。ヨスカン・デ・ブレの歌曲「千々の悲しみ」をヴィオール用に編曲したもので、神聖ローマ帝国のカール5世が愛した音楽という。古雅なメロディを紡ぎあげる素朴で力強い音色にまたもや陶然とさせられる。無事MDに収められたこれらの演奏が現在展覧会場で好評を博しているのもむべなるかな、といったところであろう。

その後、当初の目的をつがなく終え、作業スペースを見学させていただいた時に、傍らに置かれたギターが目に留まった。手に取るとこちらも先ほどのリュートと同じように軽く、一般的なモダンギターと同じぐらいの大きさなのに重さはその半分ほどしかない。例えば、アントニオ・デ・トーレス以後のモダンギターの製法や音の出方に疑問を抱いた平山氏が開発した楽器のこと。代表的な19世紀ギターであるルイ・パノルモをモダンギターの大きさにまで拡大したもので、のびやかで開放的な響きがとても印象的であった。古いものを復元するだけではなく、新たな価値を創造しようという氏の気概を感じた。

朴訥とした語り口のうちに楽器作りに賭ける情熱と音楽への愛情が滲み出るかのようなお話を引き込まれ、気がつくと外は真っ暗になっていた。3月8日のイベントが大成功を収めることを確信しつつ、帰途に就いた。

（おかもと・こうき／当館学芸員）

古楽器製作工房・平山のHP ⇒ <http://www.h3.dion.ne.jp/~kogakki/>